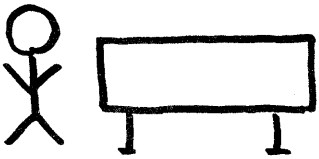
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ごっこ遊びっておもしろい

田村　玲子

はじめに

二月三日、私は警察ごっこを始めた男児（五歳児）二人に、泥棒役を頼まれ、その遊びに加わりました。その日、部屋では他に、四人の子どもがままごとコーナーでお母さんや赤ちゃんになって遊んでいました。また、五人の女児がペープサート用のベニヤ板のボード（下図）の裏で、人形劇の道具を作っていました。



警察と泥棒を中心にしたこの遊びに、回りの子どもや遊びは、様々な形で関わったり、つながったりして行きます。そして、そのストーリーは、子どもからの発想によって次々と展開して行きました。その中で、自分達だけで遊びのイメージを共有し合ったり、自分と相手のイメージをつなげたりしている子ども達…。

泥棒役として一緒に遊んでいた私は、そんな子ども達の持つ発想や力に、感心したり、驚いたり通しでした。

そして「ごっこ遊びっておもしろいなぁ」と心から思ったのです。

そこで今日は、この「警察ごっこ」の活動記録をもとに、私が感じた「ごっこ遊びのおもしろさ」について、いくつかお話したいと思います。

警察ごっこについて

＜登場人物紹介＞

警官……健太　幸治　婦人警官……佳子　志保　警察犬……男児二人　ままごとのお母さん……裕佳　赤ちゃん……男児　かくまう人……泰佳　知佳　泥棒……私　（直接、関わった人のみ）

＜警察ごっこ始まる＞

健太と幸治が積み木で囲いを作り、またブロックでピストルと無線機を作って、警官となります。佳子と志保も婦人警官として仲間に入り、四人は無線機で「応答せよ」「泥棒はいたか」などと互いに連絡を取り合っています。

＜泥棒登場！＞

子どもからの要求で泥棒となった私は、ままごとコーナーから犬のぬいぐるみを盗んで逃げます。泥棒はしばらくの間、部屋の中や外などを警察に追いかけられた末、捕まって、積み木の牢屋に連れて行かれます。

＜不思議な警察犬＞

牢屋には二匹の警察犬がおり、泥棒の私に向かって「ワンワン」と吠えながら、足にからみついて来ます。けれど、婦人警官の佳子が「この犬は頭でなでるとやさしい犬になるんですよ」と言うので、私がその通りにやってみると不思議や不思議、今度は「クーンクーン」と甘えて来ます。そこで私も安心して牢屋に入ります。

＜警察の、ままごと訪問＞

健太と幸治がままごとの部屋に行き、「警察の者ですが、この頃、誘かいが多いのでお宅の赤ちゃんを警察で預かります。」と話します。そして、赤ちゃんはよつんばいで警官について行き、その後、お母さん役の裕佳は、警察にいる赤ちゃんの所へごはんを届けに行きます。

＜脱走した泥棒に「隠れていいよ」＞

しばらくすると、婦人警官の佳子が積み木のすき間から私を逃がし、再び泥棒対警察の追いかけっこが始まります。しかし今度は、すぐに捕まってしまうわけではなく、人形劇の道具を作っていた泰佳が、ボードの裏に私をかくまってくれます。警察が聞きに来ても、「知らないよねェ」と言って、そばにいた知佳と目くばせをしています。

＜内緒で片付けよう！＞

警察がいなくなったすきを見て、また逃げ出した私……ところが今度はピストルに撃たれて、床に倒れてしまいます。こうなると、いつもなら、誰かが生き返る薬をくれたり、「十数えたら生き返れるのね。」というアイデアを出したりするのだが、この日は待てども待てども救いの手は差しのべられませんでした。それでは、子ども達は一体何をしていたか、と言うと「内緒でさ、部屋ぜーんぶきれいにしてびっくりさせよう。」と声をかけ合っているのです。そして、担任の私が目を閉じて横たわっている間に、部屋を片付け、降園前の集いができる様にいすを並べていたのでした。

＜不思議な結末＞

更におもしろいことには「もう起きていいよ」と知らせに来た佳子が、私に『一体、俺はどうしていたんだ』って言って」と頼んだのです。私がその通りに言ってみると、佳子は「ピストルに撃たれて死んでたんだよ。知らなかったの？」と言い、私も「うん……覚えてないなぁ」と答えます。初めは二人のやりとりを不思議そうに見ていた回りの子も、記憶を失った私に「泥棒だったんだよ」と教えてくれます。私も「そっかー、知らなかったなあ。何か泥棒みたいに走っていたのは覚えているけど……。」と答え、子ども達と一緒に「不思議だねェ」などと首をかしげ合いました。そして、どれだけの子どもが、この〝最後のうその世界〟を理解しているのか、私にもわからない、という不思議な雰囲気の内に、降園前のおかえりの集いの時間は始まったのでした。

警察ごっこのストーリー展開

先にもお話ししましたが、この警察ごっこでは子どもの発想によってストーリーが展開して行く場面がいくつかあります。例えば、泥棒という役割を登場させたり、牢屋に入れられた泥棒を逃がしたり、泥棒をかくまったり……というのも子ども達が自分で思いついたことであり、その時の子どものとる行動は様々です。が、その行動は大別して、二種類に分かれることに気が付きました。そこで「ストーリーの流れが変わる時の子どもの動き」の二つについて、それぞれ具体例を挙げながらお話ししたいと思います。

1　一つ目の方法について

。泥棒になった私は、逃げている途中、警官の健太と正面から出会い、ピストルを向けられました。そこで私は「もうダメだ」と手を上げてつっ立っていました。健太が私を撃つか、捕まえるかするだろうと、待っていたのです。でも健太は何もせず、それどころか「先生、このすきに逃げていいんだよ。」と自分の横を指さしたのです。私は、「彼はまだ単純な追いかけっこを楽しみたかったのだ」と気付き、「あっ、そうなの。それじゃあ、このすきに……」と言いながら逃げたのでした。

。私が、警察犬がわんわん吠えている牢屋に行くと、婦人警官の佳子が「ねェねェ、この泥棒は犬が嫌いな泥棒なのね」と案を出しました。そこで私も、その言葉に合う様に「助けてくれー。俺は犬が嫌いなんだ」と怖がったのです。

この様に、子ども達は警察ごっこで演じていた役割を離れ、健太は健太、佳子は佳子という〝自分〟に戻っています。そして戻った上で、相手に了解をとりながら、ストーリーを変化させる様なアイデアを言葉にしているのです。

2　二つ目の方法について

。泥棒の足にからみつく警察犬に向かって、婦人警官の佳子が「こら、おとなしくしていなさい」と言い、泥棒に「この犬は頭をなでるとやさしくなるんですよ」と教えてくれます。泥棒がその通りにすると、犬も「クー

ン」とすり寄って来るのです。

。警宮官の健太と幸治がままごとの部屋を訪問し「この頃、誘かいが多いので、お宅の赤ちゃんを預かります」と話し、お母さん役の子も「はい、お願いします」と赤ちゃんを預けます。

この様に、婦人警官は婦人警官のまま、警官は警官のまま、という具合に、子ども達は警察ごっこの中の役割を演じたまま、一つのセリフとして、ストーリーを変化させるアイデアを出しているのです。

さて、この警察ごっこでは、この二種類の子どもの動きが、これ以外にも数多く、入れ替わり立ち替わり現れて来ます。子ども達は突然、現実の自分にかえったり、遊びの中の役割に戻ったりしているのです。不思議なことに、それでもトラブルはなく、不自然な感じも残さずに遊びは続けられて行っています。

では一体、それはなぜなのでしょうか?どうしてそんなことができるのでしょうか?

この遊びは生活経験を積んだ五歳児の遊びである、という年令的なことを大きくふまえながら、この理由について考えてみたいと思います。

一つには、子ども達はもう既にだいぶ、自分の考えを相手にわかりやすく伝えることができ、相手もまた、それを聞いてその考えを理解できるからだと思います。また、回りの人の動きを見ながら、その人の気持ちややりたいことを察知でき、自分もそれに合った様に行動できるようになっているのです。

そしてもう一つの理由は、子ども達の中には「自分達はつもりの世界で遊んでいるんだ、作っているんだ」、すなわち「ごっこ遊びをしているんだ」という暗黙の了解があるのではないか、ということです。だからこそ〝遊び〟の世界から現実の自分にかえっても、またすぐに〝遊び〟の世界の役柄に戻れるし、相手が〝つもり〟でやっている行動に、自分も〝つもり〟のままで応えられるのだと思うのです。

五歳児においては、この暗黙の了解を理解し、実行で

きるということが、ごっこ遊びの仲間にスムーズに入り、関わるための重要な要素になっているのではないでしょうか。そして、これらが叶っていたために、この警察ごっこも、おもしろく、不思議に展開して行ったのだと思います。

ごっこ遊びのおもしろさ

初めは小さなことから始まったごっこの世界に、次第に様々な子どもが関わって、互いにイメージを共有し合う。それによって更にイメージが広がって、遊びもどんどんと広がって行く。……今回の警察ごっこに限らず、ごっこ遊びではこの様にして遊びが楽しくなって行くことが多いのではないでしょうか？また、子どもが自分以外の、他のものになって遊ぶ時（例えば警官や看護婦、ドラえもんなど）、それまではあまり一緒に遊んだことのない友達同士が、自然に関わったり、「女と遊ぶなんて恥ずかしいよなぁ」などと互いに言っていた男の子と女の子が、何の抵抗もなく一緒に遊んだりする姿を数多く見かけました。それから、看護婦さんの所に「おなかが痛いんですけど」と診てもらいに行ったり、ままごとの部屋に「ピンポーン」と行ってお客さんになったりと、他の遊びに比べると「入れて」などの固苦しいやりとりなしに、仲間が増えて行くことが多い様に思います。

では一体それはなぜなのでしょうか？

子どもは自分以外のものになることで、「やってみたい」と思いながら普段はできない想像のことをしてみるのです。また、見たり聞いたりして知っている、大人などの行動の再現をしているのです。それが、警察になっ

て泥棒をつかまえ、ピストルを撃つことでもあり、お母さんになってごはんを作ることでもあると思います。

また、自分が違うものになることで、自分以外のいろいろなものも、違うものにしてしまう、想像する心が生まれ広がるのではないでしょうか？例えば、積み木の囲いは牢屋となり、ブロックを組み合わせたものも、ピストルや無線機にと素敵に変わってしまいます。そんな「想像する心」は人間（友達）に対しても同じ様に作用するのではないでしょうか？「あんまり遊んだことないから」「女だから」などという、それまでの先入観やこだわりをはずして、友達のことを見れる様になるのだと思います。きっと、普段より心が開かれているに違いないのです。だから、ごっこ遊びには様々な子どもが関わることができ、遊びも楽しく広がる…私はそう思うのです。

これからの課題

ごっこ遊びは子どもの心を大きく柔かく開く…そんな風に考えていたら、私にとってごっこ遊びはますます魅力あるものになって来ました。そして……

。ごっこ遊びを通して子ども達が学び取るもの、子どもの中に育つ心は、もっともっと数え切れない位あるのではないか？

。想像する心や柔軟なイメージ、心が開かれることは、子どもにだけでなく大人にとっても、とても大切なのではないか？　大人の私がごっこ遊びをしていて、とても楽しく心が開放されるのは、その辺のことと関係があるのではないか？

。だとしたら、幼児期から成人への成長過程をふまえて、もう一度「ごっこ遊びの大切さ」を考えてみたい。

等々、私の中のごっこ遊びへの興味は尽きません。時間は長ーくかかっても、子ども達との遊びを楽しみながら、これからもごっこ遊びのおもしろさを一つ一つ探ってみたい……そんな風に思っています。

（横浜学園付属元町幼稚園）